朝小・サピックス共同企画

地球環境を考える ecoのとびら

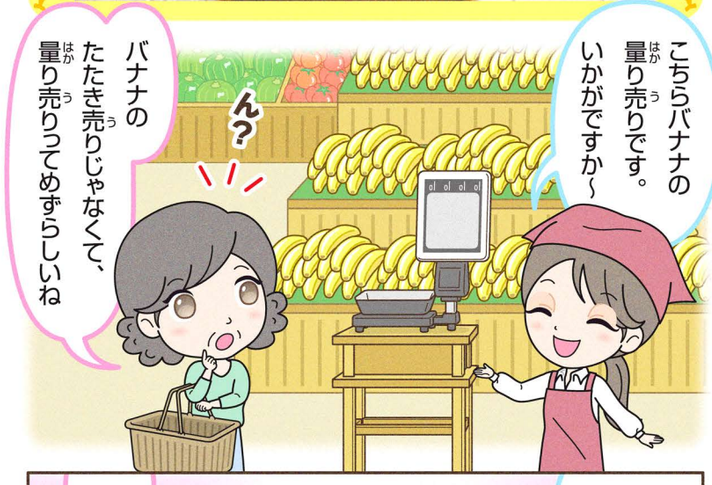
シニア版

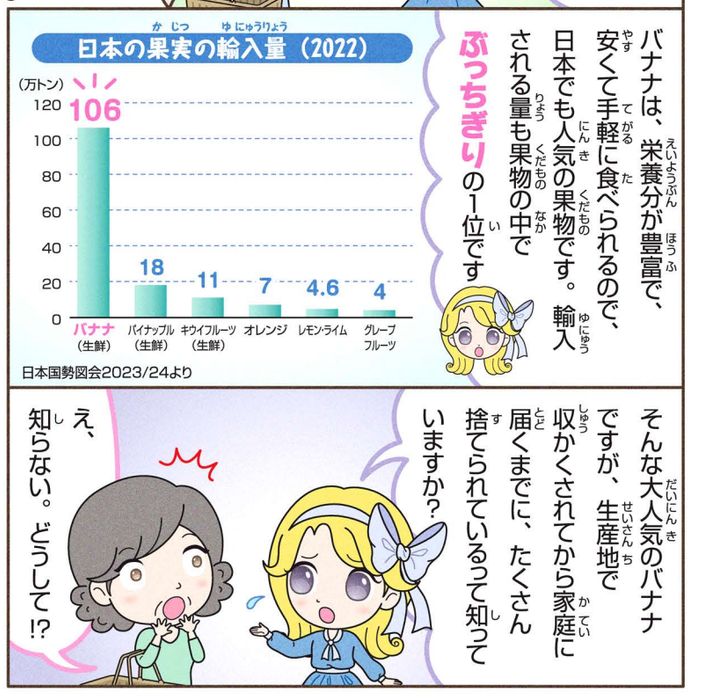
■企画・編集
SAPIX環境教育センター
www.sapientica.com/eco/
SAPIX YOZEMI GROUP

ペメ
ギリシャ神話の女神。世界で見聞きしたことを、みんなが知るまで話し続けます

先取り! 世界ホニャララの日

9月29日
「食料の ロスと廃棄に関する啓発の国際デー」
(International Day of Awareness of Food Loss and Waste)
食料のロスと廃棄の削減に向けて、問題意識と関心を高める日。





バナナは、栄養分が豊富で、安くて手軽に食べられるので、日本でも人気の果物です。輸入される量も果物の中で**ぶっちぎり**の1位です

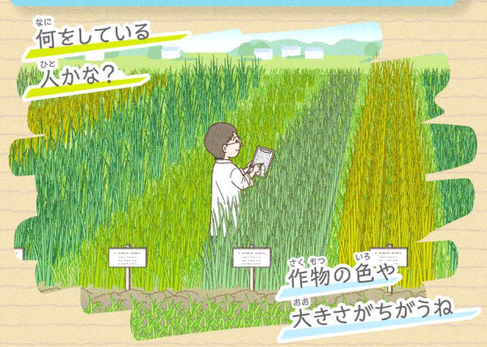
そんな大人気のバナナですが、生産地で収かくされてから家庭に届くまでに、たくさん捨てられているって知っていますか?

え、知らない。どうして!?

つけたし

日本では、食べられるのに捨てられてしまう食べ物を「食品ロス」といいますが、国際的には、生産、加工、流通で捨てられる「食料ロス(Food loss)」と家庭、飲食店、スーパーで捨てられる「食料廃棄(Food waste)」に分けて定義されています。

環境のお仕事紹介



すぐれた作物を生み出す人

イラストは、作物の育ち具合を比べているところだよ。

お米には「こしひかり」「あきたこまち」など名前がある。これを品種というよ。同じ作物でも暑さに強い、実がたくさんなるなど、特ちょうにちがいがある。新しいすぐれた品種を生み出していく人を「育種家」という。

気候変動のえいきょうで今後、気温や雨の量などが変化し、これまでどおりに作物を作れなくなったり、とれる量が減ったりすることが心配されている。食料不足にならないように新しい品種を作りだすことが期待されているんだ。

ニューストピックス

「バナナの茎でアップサイクル」

バナナは背の高い木に実るイメージですが、植物学上では草です。木の幹のように見えている部分は、何枚も重なった葉です。そんなバナナは、1年で大きくなり実をつけるのですが、一度収かくすると二度と実はつきません。ですから、収かく後は、茎を少し残して切ります。残った茎のわきからは新芽が出てきて次のバナナが育ちます。バナナは他の作物と比べて捨てる部分が多いことが課題です。切られた部分は燃やされるのですが、その量は世界で年間10億トン以上にもなるそうです。また、放置するとくさっていやなにおいがしたり、地下水がよごれたりします。

そこで最近注目をあびているのが、切られたバナナの葉から取り出した繊維をアップサイクルして、洋服や紙などさまざまな製品を作る取り組みです。

※アップサイクルとは、捨てるはずのものに手を加えて、デザインやアイデアといった価値をつけて別のものに生まれ変わらせることです。リサイクルとは、製品を一度資源にもどして、新たなものを作り出すことです。

こぼれ話

バナナのたたき売り

道ばたで、売る人がおもしろおかしくお客さんとかけ合いをしながら、少しずつ値段を下げていき、バナナを売り切る手法のことです。今から約110年前ごろから、門司港(福岡県北九州市)で始まったといわれています。現在日本で売られているバナナは、フィリピン産やエクアドル産ですが、当時は台湾のバナナがたくさん輸入されていました。門司港は台湾と地理的に近かったことから、バナナがたくさん入ってきたそうです。

バナナは、緑色のまま外国から船で運ばれ、日本で黄色くじゅくしてから市場で売りに出されます。しかし、外国からの輸送中にじゅくしてしまったり、傷がついたりしたものは、当時も商品としての価値が下がり売れませんでした。まだ食べられるうちに早く売り切って少しでもお金にかえたほうがよいということで始まったのがバナナのたたき売りだといわれています。今でも食品ロスを減らすために、見切り品が安く売られているのと同じですね。

そんなバナナのたたき売りは、物流の発達や保存技術の向上で、ほとんど見かけなくなりましたが、現在は日本の伝統文化として引き継がれています。

「ecoのとびらシニア版」は毎月第4木曜日にけいさい予定です。